心の散歩道

お風呂のお湯

子供の頃に聞いた話が大人になっても自分の心の支えになっていることがよくあります。イラストレーターとして有名な柳原良平さんが、小学校五・六年生のころ担任の先生から聞いた話は、今も忘れられない人生の教えになっているそうです。

ある日、先生はクラス全員を前にしてこんな話をしました。いいかい、きみたちがお風呂に入ったとき、お湯を自分の方に向けようとして両手でかき集めようとすると、やってきたお湯は、横からどんどん逃げてしまうだろう。ところが、それと反対にお湯を向こうへ押し出そうとすると、お湯はしらずしらずのうちに、自分のほうに集まってくる。人間の生きかたもこれによくにているんだな。自分のことばかり考えて欲張ってばかりいると、友達もいなくなり、物も失ってしまうんだ。自分のことより人のために何かするということを考えていけば、友達もできるし結果として自分も幸せになれるんだ　この先生の話を聞きながら、良平さんは、なるほどな と関心しました。そして自分もこれからは、そんな心がけで生きていこうと思ったそうです。もちろん、良平さんが先生のお話どおりに大きくなっていったかどうかはわかりません。でも人生の曲がり角に来たとき、いろんな悩みをかかえたとき、この先生のことばが、良平さんの頭の中をよみがえったのではないでしょうか。

仏事を執り行うときに廻向という言葉をよく耳にします。廻向と回向は、発音は同じで字は違いますが、一般には同じような意味で使われています。ともに亡くなられた方の菩提を弔うための儀式と受け取られていますが。廻向とは、仏教語大辞典には ㋑ 方向を転じて向かう ㋺（さとり）に向かって進む ㋩ 向かわしめる めぐらす ㋥ 功徳を他にめぐらしさし向けること仏教では一切衆生のさとりのために善行・功徳を積み向かわしめる行為 とあります。また、私たちは日常の勤行や各種の法要を営む時に、法要の最後に願はくは此の功徳をもって、普く一切に及ぼし、我等と衆生と、皆共に仏道を成ぜん と廻向文を唱えます。この一文は、形ばかりの善行を一時的にすることではなく、常に自分の心や、その身の行いを正して、慈しみの心をもって落ち着いて生きることで、我等と衆生 自分を含めた生きとし生ける全てのものが幸せに生きられますよう努めますと、唱えるのです。

ご先祖様のいのちをいただいて生かされていることに感謝し、ご先祖様を廻向し、善行を他に向かわしめる心を養うことが仏道ではないでしょうか。

平成二十五年盛夏